「東日本大震災・福島原発災害と広島大学」の発刊に寄せて

この度「東日本大震災・福島原発災害と広島大学」を発刊することになりました。平成 23（2011）年３月 11 日に発生した東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故は、わが国に未曽有の被害をもたらし、復旧・復興に数十年の年月を要すると言われています。これは、科学技術への過信に加えて自然との共存を怠ってきたわが国社会に対する警鐘とも受け取ることができます。

広島大学では、主として原発事故の発生した福島県を中心に、震災直後から継続して緊急被ばく医療チームを派遣し、医療支援などの被災地の復興支援活動に取り組んできました。本学がわが国の放射線災害の西日本ブロックの「三次被ばく医療機関」、緊急被ばく医療の拠点として位置付けられていること、本学が世界で最初の被爆地広島市に開学したこと、などから被災地の支援は本学に課せられた重要な使命として受け止め、活動してきました。本学の教職員がそのことを深く理解して、これまでに懸命に活動してきたことに心から感謝致します。また、本学の多くの教職員や学生も、自らの意思で被災地支援活動を計画し、実施してきました。

しかし本学や国内外からの温かい支援活動にも関わらず、放射線災害復興を含む被災地の復旧・復興は被災地住民の期待に沿うにはほど遠く、多くの課題を露呈しています。今後も関係自治体や団体とも連携を深めて、なお一層活動を充実させていかなくてはならないと受け止めております。

今回の「東日本大震災・福島原発災害と広島大学」発刊は、震災後丸２年を迎える本学の活動を振り返り、被災地への支援が被災地住民の期待通りに行われたか否か、を含めて支援活動の検証を行った上で、今後の活動に生かしていきたいとの思いがあります。活動に関わった教職員、学生がそのことを理解して、このまとめを作成しております。

最後になりますが、被災地の一日も早い復旧・復興を心から念じております。

平成 25 年３月１日　　　　広島大学長　浅 原 利 正

目　次

「東日本大震災・福島原発災害と広島大学」の発刊に寄せて　浅原利正（広島大学長）……………… 1
東日本大震災と広島大学…………………………………………………………………………… 4

第１章　２年間の被ばく医療支援を振り返る

被爆地ヒロシマの研究者として福島の復興を全力で支援
神谷研二（緊急被ばく医療推進センター長）…………… 8
三次被ばく医療機関の責務果たす　越智光夫（学長特命補佐、前病院長）…………………… 10
正確な知識の大切さ痛感　茶山一彰（理事・副学長、病院長）…………………… 11
気の抜けない日々を過ごす　西田良一（前病院運営支援部長）…………………… 12

第２章　ヒロシマからフクシマへ

福島第一原子力発電所事故における医療活動　谷川攻一（緊急被ばく医療推進センター　副センター長）… 14

① DMAT 出動

DMAT から緊急被ばく医療チームへ　廣橋伸之（医師）…………………………………… 16
正確な情報共有と心のケアの必要性　原 茉依子（看護師）………………………………… 17
困難極めた宿泊場所探し　畝井浩子（薬剤師）…………………………………… 18

②緊急被ばく医療調整会議の立ち上げ

放医研に残り、情報収集と物資供給に全力　鈴木文男（放射線専門家）…………………………… 19
放射線生物学の研究者として自問した日々　飯塚大輔（放射線専門家）…………………………… 20
高齢者救えず、無力さ感じる　平田大三郎（医師）…………………………………… 21
要介護の患者を保健所でスクリーニング　竹岡直子（看護師）…………………………………… 22
マニュアルなく手探りで活動　木元奈津子（看護師）………………………………… 23

③住民の被ばくスクリーニング

小児の甲状腺被ばく線量調査に当たる　田代　聡（医師）…………………………………… 24
川俣町での小児甲状腺サーベイの実際　三原祥嗣（医師）…………………………………… 25
ゼロからの検査体制構築　隅田博臣（診療放射線技師）…………………………… 26
子どもたちの衣服汚染に心痛む　安部伸和（診療放射線技師）…………………………… 27
常に意識した被ばく管理　稙山雄次（診療放射線技師）…………………………… 28
緊急時に備え出動待機で就寝　藤本利夫（事務職員）………………………………… 29

④ J ヴィレッジを診療拠点に

ミッションの気持ちの引き継ぎも大切　溝岡雅文（医師）…………………………………… 30
限られた資材で最大限の工夫　音谷順子（看護師）…………………………………… 31
職種の壁を超え知恵出し合う　原　圭一（事務職員）………………………………… 32

第３章　被災地に寄り添う

東京電力福島第一原子力発電所事故に対する主要な対応
細井義夫（前緊急被ばく医療推進センター　副センター長）… 34

①県立医大での内部被ばく特別健診

県立医大の二次緊急被ばく医療を支える　木口雅夫（診療放射線技師）…………………………… 35
研究者が率先して現地で活動を　菅　慎治（技術職員）………………………………… 36

②住民の一時立ち入り支援
住民一時立ち入りを継続支援　坂井　晃（医師）……37
最も懸念された熱中症　松浦伸也（医師）……38
立ち入り者の把握に苦労　松井啓隆（医師）……39
各機関の対応異なり調整に苦慮　西丸英治（診療放射線技師）……40
食品持ち出し禁止に住民から苦情も　藤岡知加子（診療放射線技師）……41
貴重な経験踏まえDMATに　山岡秀寿（診療放射線技師）……42
荷物抱え戻る住民に「お帰りなさい」　西中カフミ（看護師）……43
住民の心に寄り添う支援　佐々智宏（看護師）……44
笑顔に救われた思い　越智康弘（看護師）……45
被災者の立場での支援心掛ける　西岡照夫（事務職員）……46
声掛けのありがたみを実感　都田賢吾（事務職員）……47
③原発内の救急医療室
放射線と救急医療の知識を生かす　岩崎泰昌（医師）……48
救急医療室看護活動マニュアルを作成　飯干亮太（看護師）……49
④縁の下を支えて
現地で物資・人員輸送に当たる　藤岡孝男（事務職員）……50
各機関をウェブ会議システムで結ぶ　貞森拓磨（医師）……51
非常事態に備えた要員確保を　西田雅彦（事務職員）……52
自らも被災者として支援に従事　渡邊智明（事務職員）……53

第４章　全学に広がる震災への取り組み
①専門家として
ご遺体の身元確認作業に当たる　岡　広子（歯科医師）……56
空中写真を基に津波被災マップ作る　後藤秀昭（地理学　専門地域調査士）……57
放射能汚染調査と情報公開の継続を　静間　清（放射線物理学）……58
壊滅免れた大船渡病院で調剤を支援　泉谷　悟（薬剤師）……60
被災者の健康を支えて　森山美知子（看護師）……61
初めて経験した訪問診療・リハビリ　新本卓也（整形外科医師）……62
宮城・福島でみてきたこと　浦辺幸夫（理学療法士）……63
脳血管障害などの患者さんを診療　河野智之（神経内科医師）……64
②学生ボランティアとして
うれしかった「また来てね」の言葉　榎本咲良（つながり隊　第１次派遣隊長）……65
仮設住宅の世帯訪問で要望を聞く　一木　星（つながり隊　第２次派遣隊長）……66
被災者と１対１で向き合う　鬼村はるか（つながり隊　第３次派遣隊長）……67
求められるニーズは人の数だけ　富家　紬（つながり隊　第４次派遣隊長）……68
復興の流れ　地域おこしに　寺本芳瑛（つながり隊　第５次派遣隊長）……69

（資料）広島大学緊急被ばく医療派遣スタッフ・復興支援ボランティア学生 名簿……70
あとがき……72